



Title	「わかりやすい報告」できてますか?: レッツ! 聞き上手母さん(3)
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	ファミリス, 2008(8), 22-23
Issue Date	2008-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44753
Type	article
Note	編者: 社団法人 静岡県出版文化会
File Information	LKK2008_3.pdf



[Instructions for use](#)

「わかりやすい報告」できてますか？



北海道大学大学院教授
仲 真紀子

前回は、オープン質問やクローズ質問などいろいろな質問について説明し、とくにオープン質問は話を引き出すうえで大切だということを紹介しました。けれども、質問の効き目はそれだけではありません。質問には子どもの語りを導き、報告上手にする働きもあります。

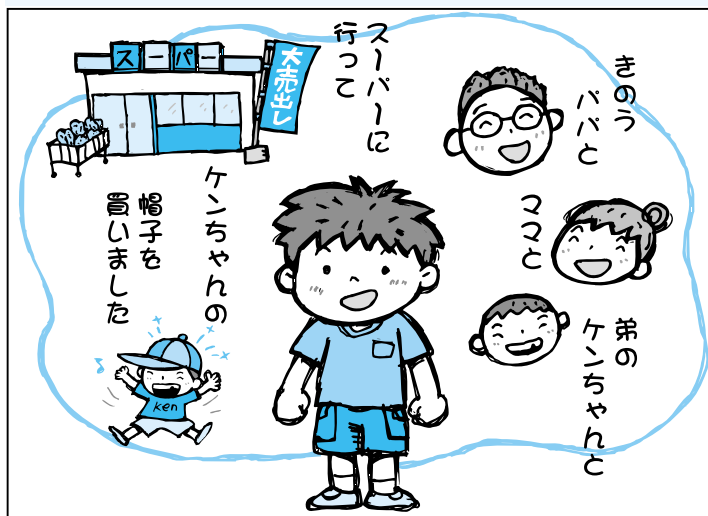
学

校から帰ってきた子どもが、お母さんに一生懸命、今日のできごとを報告しています。

「……だからね、学校に来てね、たくさん遊ぶって言ったからやったんだよ。それからおもしろいって言ってた」

学校での事情をよく知っているお母さんなら、学校に来たのは誰か、遊ぶと言ったのは誰か、何を「やった」のかなど、詳しく聞かなくてもわかるかもしれません。

しかし、話を初めて聞く人にとってはちんぷんかんぷんです。「わかる報告」には「いつ、どこで、誰が、何を、どうしたのか」が含まれていなければなりません。ま



(イラスト/村松麗子)

た、「どうした」の部分については「体験したのか、見たのか、聞いたのか、考えたのか、感じたのか」などの区別も必要です。

このような会話では、質問は「話の枠組み」を提供します。「来たのは誰?」「遊ぶって言ったのは誰?」「何をやったの?」「どこで?」「いつ?」などのWH質問をすることにより、話を初めて聞く大人は、学校であったことの全体をつかむことができます。と同時に、子どもは「そうか、話をするときは『いつ、どこで、誰が……』が大切なんだ」と学ぶことができるでしょう。

実際、アメリカの心理学者であるマケイブ先生は、「いつ?」「どこ?」と尋ねることの多い母親の子どもは、時間や場所についての報告が多くなることを紹介しています。

昭

和女子大学の藤崎先生による、幼稚園や保育所での「生活発表」についての研究も参考になります。生活発表というのは、休み明けに、子どもに休み中のできごとをみんなの前で話してもらうという活動です。

年少の幼児は、みんなの前に出てきても、何をどう話せばよいのかわかりません。そのようなとき保育士は、「何があったの? (どんなことでもお話しして)」と答えやすい質問をします。「お買い物」と子どもが答

えれば、「誰と?」「パパとママとケンちゃん」と答えれば、「どこに行ったの?」……

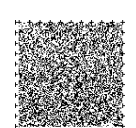
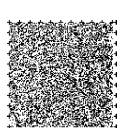
このようなやりとりを繰り返すうちに、就学前ころには、「昨日、パパとママと弟のケンちゃんと近くのスーパーにお買い物に行きました。ケンちゃんの帽子を買いました。ケンちゃん、うれしそうだった!」などと、立派に報告ができるようになります。

藤崎先生は、子どもが自発的に話せるようになるにつれ、保育士がだんだんと質問を減らしていくことを示しています。自転車の練習をするとき、一人で走れるようになれば補助車輪をはずすように、子どもが自力で話せるようになるにつれ、大人は質問を控えるようになります。

小

学校に入れば、子どもは作文を書いたり、新聞作りをする中で、報告の仕方を学んでいくでしょう。

最初は、遠足のことを書くのにも「朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて……」と、全部書かなければ気がすまなかった子どもも、「いちばんおもしろかったことは何?」などの方向付けをもらうことで、わかりやすい報告ができるようになっていきます。そういった報告の枠組みづくりにおいても、質問は大切な役割を果たします。



●なかまきこ ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学、発達心理学専攻。母子会話、子どもの記憶に関する心理学研究のほか、子どもの司法面接、目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」(共著、北大路書房)、「子どもの面接法—司法手続における子どものケアガイド」(アルドリッジ・ウッド著、仲編訳、北大路書房)など。